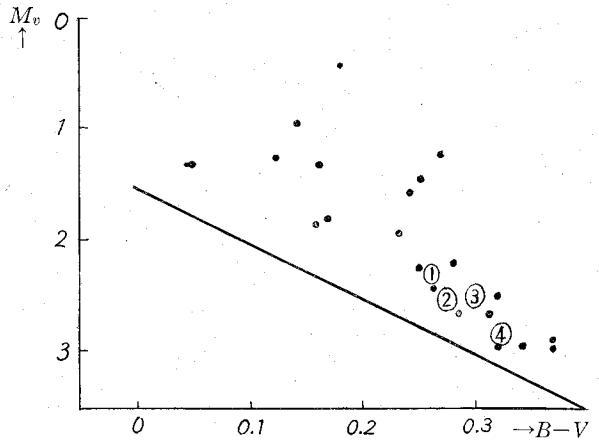


◇ 1月の天文暦

日	時	記 事
2	23	月 最遠
3	6	朔
5	22	小寒 (太陽黄経 285°)
8	18	水星 西方最大離角 (23°)
11	5	木星 留
11	6	上弦
17	10	月 最近
17	17	土用 (太陽黄経 297°)
17	23	望
20	15	大寒 (太陽黄経 300°)
24	20	下弦
30	3	月 最遠
30	5	火星 留



ヒアデスの明るい部分、番号をつけたのが金属線星らしい。大気の深い部分では、ふつうの星とあまり違ってない。浅いところでは、主系列にくらべ、電子圧が低く、乱流速度が大きいという事情がある。浅いところのできる金属線は、そのためにあたかももっと絶対光度の大きい星の様子を示す。しかし星団に属する金属線星からわかるように、主系列にごく近いのである。

金属線星はどんな散開星団にも見られるのではない。A型位で主系列から離れはじめている星団にはほぼ限られているといつてよい。ヒアデスのほか、プレセペや髪座などである。金属線星は、A型後半位の特定部分にあるので、進化論的考えも魅力がある。主系列からはなれはじめる星の半径の増加がきいているかもしれない。ただ星団に属するこの部分の星が、すべて金属線星というわけではない。金属線星の自転速度は極めて小さいが、これが何を意味するのかはまだわかっていない。

牡牛座 63 番星

われわれが一番近い散開星団であるヒアデスは、多くの研究に基礎的資料を、提供してきたが、いわゆる金属線星もヒアデスの HR 図を調べることで見つかったのが最初である。63 Tau は、5.7 等ほどの見ばえのしない星だが、金属線星の典型として知られている。低分散スペクトルでみて、水素やほかの金属にくらべ、カルシウムの線の弱いのが特徴である。

この 20 年来、金属線星について多くの人が仕事をしたが、まだ本質がはっきりしていない。化学組成がふつうの星と違う点に注意されているが、それですべて済むようではない。色の観測などでみられたふつうの星からのズレは、吸収線の補正をしてやると、大部分かたづく

東京における日出入および南中 (中央標準時)

I 月	夜明	日出	方位	南中	高度	日入	日暮
日	時 分	時 分	時 分	時 分	時 分	時 分	時 分
1	6 15	6 51	-28.1	11 44	31.3	16 38	17 14
11	6 16	6 51	-26.6	11 49	32.5	16 47	17 22
21	6 14	6 48	-24.2	11 52	34.4	16 57	17 31
31	6 8	6 42	-21.0	11 54	36.9	17 7	17 41

各地の日出入補正值 (東京の値に加える)

(左値は日出, 右値は日入に対する値)

分	分	分	分
鹿児島 +27	+46	鳥 取 +22	+22
福 岡 +32	+42	大 阪 +15	+19
広 島 +26	+32	名古屋 +10	+12
高 知 +20	+32	新 潟 +8	+2
		仙 台 +2	-11
		青 森 +9	-17
		札 幌 +13	-26
		根 室 -4	-44

◇ 1月の日月惑星運行図

